有界性と比喩的拡張

景　山　弘　幸

0．は　じ　め　に

本稿では、英語にみられる「有界表現」対「非有界表現」(bounded vs. unbounded expression) についてその解釈に影響を与えるいくつかの要因 (Declerck(1979) 等で提示されているもの) を「項構造」(argument structure) あるいは Goldberg (1995) でいわれる意味での「構造」(construction) の変更を伴うものとそうでないものという観点から整理し、レベルの違いこそあれいずれも「比喩的拡張」(metaphorical extension) という原理が関わっていることを示したいと思う。「有界表現」対「非有界表現」(bounded vs. unbounded expression) という問題はもちろん英語における「相」(aspect) の問題と深く関わる問題である。[1]

1．「有界表現」対「非有界表現」(bounded vs. unbounded expression)

「有界表現」対「非有界表現」(bounded vs. unbounded expression) は次のように定義される。

bounded expression: bounded expressions represent situations as terminating.
Declerck(1979) p.765

unbounded expression: unbounded sentence (expression) does not represent a situation as terminating. ibid. p.766

つまり「有界表現」(bounded expression) とは例文 (1 a) のように、ある「事態」(situation) を「終結する」(terminating) ものとして表現したものであり、一方「非有界表現」(unbounded expression) とは例文 (2 a) のように、ある事態を終結するものと表現しないものである。

(1) a. John ran a mile in an hour. (bounded)
b. !John ran a mile for hours.[2]

(2) a. John was running for an hour. (unbounded)
b. *John was running in an hour.

ここで使われている「有界性」(boundedness) の診断法は「継続を表す副詞句」(durarive adverbial)、特にここでは *in an hour* および *for hours* との共起可能性である。Declerck (1979) では *in an hour* は「有界継続副詞句」(+bounding durative adverbial)、*for hours* は「非有界継続副詞句」(−bounding durative adverbial) と呼ばれ、それぞれ「有界表現」(bounded expression)、「非有界表現」(unbounded expression) と共起することになる。「有界性」(boundedness) の診断法には他に (3)、(4) の例文のように進行形で表される表現から単純形で表される命題の真理値を含意できるか否か、また (5)、(6) に示されるような表現される事態の「均質性」(homogeneity) が指摘されている。

(3) a. John was drinking coffee.

b. John drank coffee. (unbounded)

(4) a. John was drawing a circle.
b. John drew a circle. (bounded)

(3a)が真であればそれから(3b)が真であることを推論できるような場合、(3b)は「非有界表現」(unbounded expression)である。一方、(4a)が真であってもそれから(4b)が真であることを推論できないような場合、(4b)は「有界表現」(bounded expression)である。

(5) a. John drank whisky between two o'clock and four. (unbounded)
b. John drank whisky between two o'clock and three.

(6) a. John drank six glasses of whisky between two o'clock and four. (bounded)
b. John drank six glasses of whisky between two o'clock and three.

(5a)から(5b)はいえるが、(6a)から(6b)はいえない。(5a)は(5b)と「均質な事態」(homogeneous situation)であり、「非有界表現」(unbounded expression)である。一方、(6a)は(6b)とは「異質な事態」(heterogenenous situation)であり、「有界表現」(bounded expression)である。

さて、「有界性」(boundedness)の定義で重要なのは特に「非有界表現」(unbounded expression)が「終結点」(terminal point)を持たない「事態」(situation)を指す、とは定義されないことである。つまり実際の「事態」(situation)が「終結点」(terminal point)を持つかどうかは言語学の関心事としての「非有界表現」(unbounded expression)の定義とは無関係ということである。Declerck (op.cit.)ではつぎのように述べられている:

> (un)-boundedness is a characteristics of situations assigned to them by propositions (i.e. linguistic representations of situations). p.765
>
> 非有界性とは命題(すなわち事態の言語学的表示)によって事態に与えられる、事態が持つ特徴である。

この言明が示しているのは「有界性」(boundedness)という概念は「事態」(situation)そのものの特徴ではないということである。あくまでも「言語表現された事態」(linguistic representations of situations)の特徴なのである。したがって、例文(7c)のように動詞 *walk*(歩く)が指す実際の「事態」(siuation)は「非有界」(unbounded)であっても、(7a)の *walk to the station*(駅まで歩く)という「言語表現された事態」(linguistic representations of situation)は「有界」(bounded)となり、(7b)が示すようにもはや「非有界」(unbounded)ではなくなるのである。

(7) a. John walked to the station in an hour. (bounded)
b.*John walked to the station for hours.
cf. c. walk for hours. (unbounded)

2.「有界性」の解釈に寄与する要因（some factors contributing to the interpretation of boundedness）

さて「有界性」(boundedness) の解釈に関与するのは動詞のみではないことがすでにこれまで指摘されたきた。[3] つぎの例文はそれぞれ「直接目的語」(direct object)、「間接目的語」(indirect object)、さらに「主語」(subject) が「有界性」(boundedness) の解釈に関与している例である。

(8) a. John drank whisky for hours. (unbounded)
b. !John drank six glasses of whisky for hours.

例文（8 a）のように動詞、*drank* の「直接目的語」が *whisky* の場合は、全体として「非有界表現」(unbounded expression) となるが、（8 b）のように「直接目的語」が *six glasses of whisky* となると全体として「有界表現」(bounded expression) となり、「非有界継続副詞句」の *for hours* とは相入れなくなる。

(9) a. For an hour Den Uyl handed out the Labour Party badge to congress-goers. (unbounded)
b. !Den Uyl handed out the Labour Party badge to a congress-goer for an hour.

例文 (9) が示しているのは、「間接目的語」が無冠詞複数 (bare plural) の *congress-goers* の a 文は全体として「非有界表現」(unbounded expression) となるが、b 文のように「間接目的語」が *a congress-goer* となるともはや「非有界表現」(unbounded expression) とは解釈されないということである。

(10) a. For hours water ran out of the tap. (unbounded)
b. !For hours a litre of water ran out of the tap.

(8) − (10) Declerck p.764

例文 (10) では「主語名詞句」の違いによって文全体の「有界性」(boundedness) が変更されることが示されている。[4]

上記以外にも「起点・着点」(source·goal)、「結果の述語」(resultative predicate)、「ある種の小辞」(particle)、「進行形」(progeressive form)、「部分格を表す前置詞」(partitive preposition) が「有界性」(boundendness) の解釈に影響を与えている文が見いだされる。[5]

(11) a. !push the car out of the garage for an hour
b. push the car out of the garage in an hour (bounded)
cf. c. push the car for an hour (unbounded)
d. *push the car in an hour

Tenny (1987) p.180

(12) a. push the cart to New York in an hour (bounded)
b. ?push the cart to New York for an four

Tenny (1988) p.6

例文 (11) では「起点」(source) を示す、*out of the garage* の存在が全体として「有界表現」(bounded exptression) をもたらし、例文 (12) では「着点」(goal) を示す、*to New York* がやはり「有界表現」(bounded expression) をもたらしている。

(13) a. Terry wiped the table clean in five minutes. (bounded)
b. !Terry wiped the table clean for five minutes.

Goldberg p.188

例文 (13) はいわゆる「結果の述語」(resultative predicate) の *clean* の存在によって全体として「有界表現」(bounded expression) となることを示している。

(14) a. John sawed the plank through in two minutes. (bounded)
b. !For a couple of minutes John sawed the plank through.
cf. c. John sawed through the plank in two minutes. (bounded)
d. For a couple of minutes John sawed through the plank. (unbounded)

Declerck p.787

例文 (14) はある種の「小辞」(particle)[6]の *through* の生起する位置によって「有界性」(boundedness) の解釈が変わることを示している。

(15) a. John knitted a sweater. (bounded)
b. John was knitting a sweater. (unbounded) ibid. p.767

例文 (15) は「進行形」(progressive form) により「有界表現」(bounded expression) が「非有界表現」(unbounded expression) と解釈されることを示している。

(16) a. *John drank the gin for hours.
b. John drank from the gin for hours. (unbounded) ibid. p.782

例文 (16) では「部分格を表す前置詞」(partitive preposition) である、*from* の存在によって「有界表現」(bounded expression) が「非有界表現」(unbounded expression) と解釈されることが示されている。

3．2つのタイプの要因 (Two types of factors)

前節でみた様々な要因を「項構造」(argument structure) を変更するものとしないものに分けて考えたい。ここで「項構造」(argument structure) と呼ぶものは Goldberg (1995) でいわれている「構造」(construction)、つまり一連の「主題関係」(thematic relations) を表す「項構造」(argument structure) のことである。

ＴＹＰＥ　Ａ：「項構造」(argument structure) を変更するもの

「着点」(goal)[7]	例文 (12)
「結果の述語」(resultative predicate)	例文 (13)
「小辞」(particle)	例文 (14)

ＴＹＰＥ　Ｂ：「項構造」(argument structure) を変更しないもの
「進行形」(progressive form)　例文 (15)
「部分格を表す前置詞」(partitive preposition)　例文 (16)

さてここで問題となるのは「有界性」(boundedness) いうそもそも厄介な「相」(aspect) に関する解釈、しかも一見例外的 (exceptional) あるいは周辺的 (marginal) にも感じられる例を含むこれらの現象に統一的な説明は可能なのかという問題である。

４．０　比喩的拡張 (metaphorical extension)

この問題を解くための説明原理として「比喩的拡張」(metaphorical extension) を使ってみたいと思う。「比喩」(metaphor) は次のように定義される。

> metaphor: as a process whereby one domain of experience is conceptualized in terms of another.　Taylor (1989) p.215

「比喩」、より正確には「比喩作用」による説明の優れている点は、その説明力の強さ、つまり良い意味でも悪い意味でも、何でも説明できそうな点だけにあるのではなく、実は同時に対象となる事例の「周辺性」(marginality)、あるいは「低い生産性」(partial productivity) を説明できる点にある。[8] 今回「比喩的拡張」を使って説明しようとする背景にはとりもなおさず当該現象が「例外的」、「周辺的」な性質を持つことを正当に記述したいと考えるからである。

さて比喩的拡張としてこれまで「語彙的拡張」(lexical extension) と「構造的拡張」(constructional extension) が考えられている。

metaphorical extension
　lexical extension　(category extension)
　constructional extension　(argument structure)
　　Taylor ch.7,11

「語彙的拡張」は例えば、*Guns kill people.* という文において Guns が、典型的には [+animate] という素性を持つ動作主 (agent) として機能するような事例であるが、今回の議論とは直接関係はない。そこでまず「構造的拡張」を手がかりにしたいと思う。

４．１　ＴＹＰＥ　Ａ

観察的一般化として項構造の変更を伴うタイプＡで決定的な要因は何らかの意味で「着点」(goal) という主題関係を担う項ということがいえそうである。項構造の変更を伴うタイプＡは、Taylor (1989) での「統語構造の比喩的拡張」(metaphorical extension of syntactic constructions) によって説明がつきそうである。

metaphorical extension of syntactic constructions:
　eg. transitive construction: the agent-action-patient schema, characteristic of transitive events, gets projected on to states of affarirs which are not inherently transitive.　ibid. p.215

Taylor が例としてあげている「他動性拡張」(transitivity extension) は今回扱っている「有界性」(boundedness) の解釈と無縁ではない。

(17) a. We swam.
b. We had a swim.

例文 (17b) は (17a) が「他動性拡張」(transitive extension) をうけたものである。その「有界性」(boundedness) の解釈は異なる。

(18) a. We swam for hours on end. (unbouded)
b. *We had a swim for hours on end. ibid. p.216

transitivity schema: agent - action - patient

(18b) の例文では「比喩的拡張」によって上記「他動性スキーマ」(tansitivity schema) を採用したために *have a swim* が、*swim* が本来持つ「非有界性」(unboundedness) を凌賀して一時的に「有界表現」(bounded expression) となり、継続を表す副詞句、*for hours on end* と衝突していることが示されている。但し、「比喩的拡張」はなにも「有界性」(boundedness) に関してのみ影響するわけではない。

(19) a. He swam the Channel.
b. He swam across the Channel.

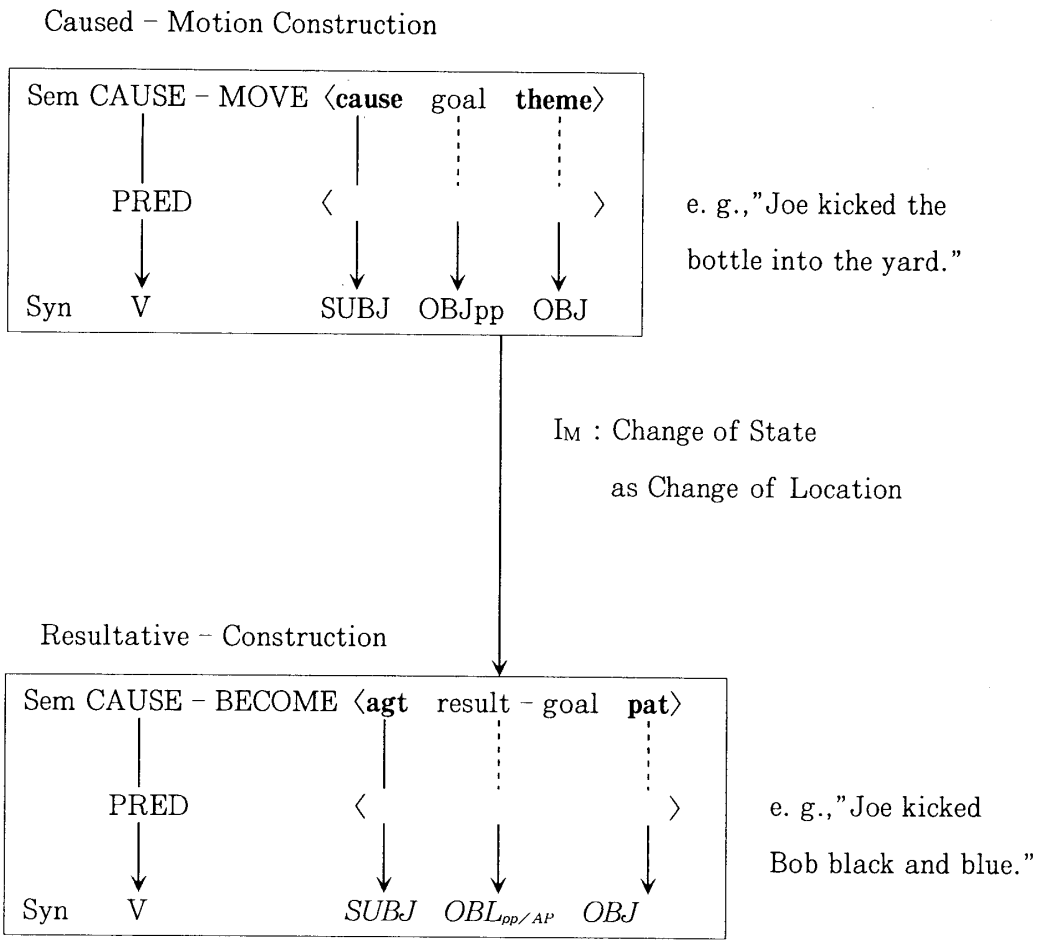
(19a) の例文では、*the Channel* が「他動性スキーマ」の目的語位置におかれることで「被動者性」(patienthood) の解釈を一時的に受け、ひるがえって主題の「動作主性」(agenthood) が臨時的に高められ、例えば *He* の勇敢さが表現されるといえる。

さて今回問題としている項構造の変更を伴うタイプはどう説明されるだろうか。付加されている項がいずれも「着点」(goal) であることはすでに指摘したところである。「比喩的拡張」をもちだすまでもなく「場所の変化」(change of location) を表す「着点語句」(goal phrase) を持つ例文 (20) 、また「終結点」(terminus or result (in Bolinger (1971)'s words)) を表す「相小辞」(aspectual particle) を持つ例文 (21) は、「有界表現」(bounded expression) の要件である「終結点」(termination point) を含むことから文全体が「有界」(bounded) の解釈を持つことが自動的に説明される。

(20) (=(12)a). push the cart <u>to New York</u> in an hour
goal

(21) (=(14)a). John sawed the plank <u>through</u> in two minutes.
terminus

つぎは「結果の構文」(resultative construction) である。 Goldberg (1995) は「結果の構文」(resultative construction) の分析を比喩的拡張と同じ考え方をとりこみながら分析している。



Goldberg p.88

上の図によって「結果の構文」は「比喩的拡張リンク」(metaphorical extension link) によって「運動使役構文」(caused-motion construction) に関係づけられている構文であることが示される。「結果を表す語句」(result phrase) は「着点の比喩的タイプ」(metaphorical type of goal) であり、「状態の変化」(change of state) を表す。いずれにしろ「着点」(goal) であるのでこの要素は「有界表現」(bounded expression) 定義に含まれる「終結表現」(terminating expression) であり、文全体の解釈は「有界」(bounded) ということになる。

(22) (=(13)a). Terry wiped the table clean in five minutes.
metaphorical goal

4．2 TYPE B

残された問題は項構造の変更を伴わないタイプの説明である。このタイプには例文 (23) のような「(非) 有界継続副詞句」を除いた表現自体が「有界性」(boundedness) に関して曖昧な事例も含まれる。[9] 継続を表す副詞句については、副詞句を取り除いた表現の「有界性」(boundedness) を副詞句が変更することは基本的にはなく、補助的に文全体の「有界性」(boundedness) の解釈に参与する。

(23) a. John washed the sheet all day. (bounded)
b. John washed the sheet in ten minutes. (unbounded)
Declerck p.784

残るは「進行形」(progressive form) と「部分格を表す前置詞」(partitive preposition) である。両者とも項構造の変更を伴わないことから項構造の比喩的拡張に頼る説明は出来ない。「進行形」と「部分格を表す前置詞」は「項」(argument) ではなく「文法手段」(grammatical means) あるいは「文法標識」(grammatical marker) でありその機能はそれぞれ動詞と名詞の「非完結性」(imperfectivity、今回の議論では「非有界性」(unboundedness) とほぼ同義とみなす) を表現することである。

ここでこの種の意味解釈上の比喩的拡張を次のように述べておきたい。

Metaphorical extension of semantic interpretation in terms of grammatical means: a process whereby one domain of semantic interpretation is temporally conceputualized in terms of grammatical means.

文法手段による意味解釈の比喩的拡張：文法手段によって意味解釈のある領域が一時的に概念化される過程。

この言明の背景には、項構造とは別のレベル（より具体的な文法形式が関わる意味解釈レベル）でも比喩的拡張による説明が可能かどうか探るもくろみがある。つまり「比喩作用の偏在性」(ubiquity of metaphor) の検証の1つという位置付けである。[10]「比喩的拡張」(metaphorical extension) ということで、今回扱っているような文が、他の文と全く同程度に適格であるとか、単に例外的な存在とするのではなく、対象となる文の存在基盤を述べつつ、同時にその周辺性を表したいのである。

「進行形」(progressive form) の場合（例文 (24b)) は、「進行形」という「文法手段」(grammatical means) 自体が持つ意味特性 (semantic property) つまり「未完結性」(imperfectivity) が「有界性」(boundedness) という領域で *knit a sweater* という事態が持つ「有界性」(bounded) (例文 (24a) 参照) を一時的に凌賀し、「非有界継続副詞句」(unbounding durative adverbial) と共起していると説明される。

(24) a. (=(15)a) John knitted a sweater.
bounded

b. (=(15)b) John **was** knitt**ing** a sweater for hours.
bounded
imperfective → unbounded

こう述べることによってしばしば (24) の文に関して問題とされる *knit a sweater* という事態は「有界」(bounded) なのに進行形を伴った場合には副詞との共起可能性から見て、「非有界」(unbounded) と言わねばならぬというジレンマから解放される。ちなみに Declerck (op.cit.) は「進行形」(progressive form) は「有界事態」(bounded situation) を「非有界事態」(unbounded situation) にすると単純に述べているが、正確にいうと「進行形」(progressive form) は *knit a sweater* という「有界事態」(bounded situation) を「未完結的」(imperfective) に、つまり事態の内部構造に言及する視点でもって言語表現する手段ということになる。[11]

先に述べた「継続を表す副詞句」にも比喩的効果は弱いながらもある。それが例文 (25) にみられる「繰り返し」(repetitive) の解釈である。なおこの解釈は周辺的なものである。(25) の下線部の事態は通常「有界事態」(bounded situation) であるが、「非有界継続副詞句」(－bounding durative adverbial)、*for hours* により臨時的に「非有界事態」(unbounded situation) つまり

「有界事態」(bounded situation) の繰り返しとして解釈されると説明される。

(25) John entered the building **for hours.**
bounded
→ **repetition of bounded situation** (=**unbounded**)

「部分格を表す前置詞」(paritive preposition) の場合 (例文(26b)) は、太字で示される *from* という「文法手段」が、それが持つ「部分格」(partitive) すなわち「終結」(terminating) しないという「非有界」(unbounded) の特性によって、下線部の名詞句、*the gin* の「有界性」(boundedness) という領域で比喩的 (つまり臨時的) に「非有界」(unbounded) の解釈を強要していると説明される。

(26) a. (=(16a)) *John drank the gin for hours.
bounded (定冠詞 the による)
b. (=(16b)) John drank **from** the gin for hours. (unbounded)
bounded
→ **unbounded**

ドイツ語などと違って「部分格を表す前置詞」(partitive preposition) は、英語においては周辺的な現象といわれる。単純に *from the gin* が「非有界」(unbouded) だというのではなく、本来「有界」(bounded) である *the gin* に比喩的拡張が起こって臨時的に「非有界」(unbounded) になっていると説明することで、この種の文の周辺性を示す可能性があるかもしれない。

5. 1つの帰結 (one consequence)

4. 2節で述べた「項構造」(argument structure) の変更を伴わないタイプの現象を単に「有界性」(boundedness) の変更という記述とせず「比喩作用」の一つとみることによって少なくとも次のような進行形を含むやはり周辺的な文を説明できる。

(27) a. John is knowing all the answers to test questions more and more often.
b. Sue is believing in God ever more strongly.
Binnick (1991) p.173

(27) の文の動詞、*know*、*believe* は一般に「状態動詞」(stative verb) と分類され、進行形とは相入れないとされる。しかし (27) の文はいずれも容認可能である。(27) の文はいずれも比較級の副詞句という「文法手段」によって *know*、*believe* が程度の違いを持つ「過程動詞」(process verb) として臨時的に解釈されるということができる。これは動詞の「状態性」(stativity) という領域に比喩的拡張が及んだ事例である。[12]

(28) a. I've only had six whiskies and already I'm seeing pink elephants.
b. She's always buying far more vegetables than they can possibly eat.
Comrie (1976) p.37

(28a) の例文は「桃色の象を見ているのが現実世界ではなく想像上の世界である」という解釈を受けるといわれる。(28b) の例文は「彼女が本当に買いすぎだ」という感情を強調しているといわれる。これらの事例は動詞の特性という領域ではなく、それぞれさらに別の領域 ((28a) では「現実世界」対「仮想世界」、(28b) では「中立的記述」対「感情的記述」という領域) で比喩的効果が及んでいる例といえるかもしれない。[13]

6. おわりに

本稿では英語の「有界性」(boundedness) の解釈に関わる要因を「項構造」(argument structure) の変更を伴うタイプと伴わないタイプに分け、両タイプともレベルの違いはあれ「比喩的拡張」(metaphorical extension) という原理が働いている可能性を述べた。

※本稿は第12回 CFWG (Cognitive Functional Working Group) (1995.9.27 於北海道大学) で口頭発表したものを加筆訂正したものである。また本研究は平成7年度札幌大学研究助成 (共同研究『英語のテンス・アスペクトの研究』) の成果の一部である。

注

1. 「相」(aspect) の定義または「完結性」(perfectivity) の定義およびそれらと英語の言語形式、実際の事態等との関係についてはいまだ決着がついていない。一応の定義とその困難さを示す言明をあげておく。

Definition of aspect

> ･･･aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation. Comrie 1976 p. 3
>
> cf. Tense relates the time of the situation referred to to some other time, usually to the moment of speaking. ibid. p. 2

Definition of perfectivity

> ･･･perfectivity indicates the view of a situation as a single whole, without distinction of the various separate phases that make up that situation: while the imperfective pays essential attention to the internal structure of the situation.
>
> ibid. p.16
>
> I think it would be better to do without the terms perfective and imperfective except in dealing with the Slavic verbs, where they have a definite sense and have long been in universal use. In other languages it will be well in each separate instance to examine carefully what is the meaning of the verbal expression concerned, and whether it is due to the verb itself, to its prefix or suffix, to its tense-form, or to the context. Different things are comprised under the term perfective.
>
> Jespersen 1924 p.288

2. 感嘆符は、繰り返しでない読み (nonrepetitive reading) では容認不可能ということを示す。

(Declerck (1979))

3．動詞の分類からいえば、「状態動詞」(static verb) は一般に「非有界表現」(unbounded expression) に用いられ、「動的動詞」(dynamic verb) においてはその下位分類における「継続動詞」(durative verb) がある一定の条件下で「有界対非有界表現」で用いられ、「瞬時動詞」(punctual verb) はその性質上「有界対非有界」には関与しない、としたいところだが、実際は各動詞が様々な事態（有界、非有界共に）の表現に参与する。従って決定的なのは動詞の性質のみではなく、動詞の性質とその他の要因との絡み合いということになる。本稿もその線に沿った研究である。

4．主語・目的語名詞句の内的特性と「有界性」(boundedness) の関係については Declerck (1979) を参照。

5．他には、時制 (tense)、否定辞 (negative particle) によって「有界性」(boundedness) が影響を受けたり、文脈 (context) の助けなしには「有界性」が判断できない例もある。

6．この種の「小辞」(particle) はしばしば「相小辞」(aspectual particle) と呼ばれる。

7．「着点」(goal) の中に「起点」(source) を含めることにする。なぜなら「起点」を含む事態は「起点」を離れた時点で「終結する」(terminating) と考えられるからである。

8．この点に関しては、Taylor (1989)、Goldberg (1995) を参照。

9．Declerck は (23) のような文を「θ－有界事態」(θ－bounded situation) として分析している。

10．比喩作用については、山梨 (1988)、岩田 (1988) を参照。

11．「未完結性」(imperfectivity) という語は誤解を招きやすい。ここでは「未完結」(imperfective) とは「事態」(situation) そのものの特性ではなく、言語表現者の「視点」(viewpoint) に関する特性と考える。注1参照。

12．この事例を動詞 know、believe は共に「状態動詞」(stative verb) と「過程動詞」(process verb) という2つの「辞書項目」(lexical entry) を持つと記述する道をとるか、1つの「辞書項目」と「比喩作用」を用いる説明をとるかは依って立つ言語観次第である。

13．「比喩的拡張」がどういった領域で起こるのかをはっきりさせるという問題は今後の課題であるが、認知文法の研究にその手がかりがありそうである。

参 考 文 献

Binnick, R.I. 1991. *Time and the verb - a guide to tense and aspect.* Oxford University Press.

Bolinger, D. 1971. *The Phrasal Verb in English.* Harvard University Press.

Comrie, B. 1976. *Aspect.* Cambridge University Press.

Declerck, R. 1979. Aspect and the bounded／unbounded (telic／atelic) distinction. *Linguistics 17.*

Goldberg, A.E. 1995. *Constructions.* The University of Chicago Press.

岩田純一、1988.「補稿「比喩ル」の心」山梨正明著『比喩と理解』

Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar.* W·W·Norton & Company

Taylor, J.R. 1989. *Linguistic Categorization.* Clarendon Press.

Tenny, C. 1987. *Grammaticalizing Aspect and Affectendnsee.* Ph. D. diss. MIT.

_____. 1988. The aspectual interface hypothesis:the connection between sntax and lexical semantics. *Lexicon Project Working Paper 24.* MIT.

山梨正明 1988.『比喩と理解』 東京大学出版会